

ユニークな特徴を持つ 山岳型高層湿原

北海道は湿原の宝庫で、さまざまなタイプの湿原があり、低地では釧路、サロベツなどが有名だし、山地としては大雪山の沼の原と沼の平、天塩山地の松山とピアシリ、ニセコ山地の神仙沼などが知られている。

雨竜沼湿原もその一つだが、日本の山地湿原の中でも、もっともユニークな特徴を持つ。すなわち、山地湿原としては尾瀬が原に次いでそのスケールが大きい上、ほぼ真円形の池塘（ちとう／湿原の沼）が多く分布している。しかも、これらの池塘は柵田のように高低差をもって並んでいて景観にも変化が大きい。

この湿原は暑寒別山地のほぼ中央部にあつて暑寒別岳、南暑寒別岳、恵岱岳、群馬岳などに囲まれた緩やかな台地上に成立したもので、標高850m、面積はおよそ100ha。ほぼ中央にペンケベタン川が西から東へ蛇行しながら流れ、その両側に多数の池塘が並ぶ。池塘を中心としてミズゴケをベースとした群落が発達していて、ホロムイソウ、ホロムイイチゴ、ヒメシヤクナゲ、ツルコケモモ、モウセンゴケ、ワタスゲなどが多い。池塘にはオゼコウホネ、エゾノヒツジグサなどが浮かぶ。

湿原の周辺はチシマザサ群落によって囲まれている。チシマザサは水に強いので湿原の水位が低下すればたちまち侵入を開始する。いまでも各所

でササの展開しつつある状態がみられる。今後、湿原の遷移（植物群落の移り変わり）に大きく影響を与えるだろう。これは北海道西部（日本海側）の湿原の宿命でもある。つまり日本海斜面の多雪地帯にチシマザサが多く分布するので、この地方の湿原は多かれ少なかれササ原に転じる可能性が高いのだ。ニセコの大谷地湿原などはその典型的な例で、すでに大部分がササ原になってしまった。雨竜沼湿原もその美しい姿を少しでも長く保とうとするなら、いまのうちからササの展開を抑える手だてを考えなければなるまい。

雨竜沼湿原では121種の湿原植物が報告されている。これらの植物によって構成される群落は37群落に達するという。北海道だけでなく湿原の種ならびに群落の多様性はきわめて高い。

湿原は四季それぞれに魅力的だが、6月下旬から8月にかけては花がもつとも多くて華やかである。エゾカンゾウ、ヒオウギアヤメ、シナノキンバイソウ、チシマフウロなどさまざまだが、エゾカンゾウ（ゼンテイカ）がもっとも目を惹く。円形の池塘は土壤凍結によって形成された氷塊が後に融けてできたものと考えられる。

雨竜沼という名前は、明治年間に陸軍陸地測量部によって最初に地形測量が行われて5万分の1の地形図が作成された時に名づけられた。その時の測量はろくな道路もなかった頃だから、山地の